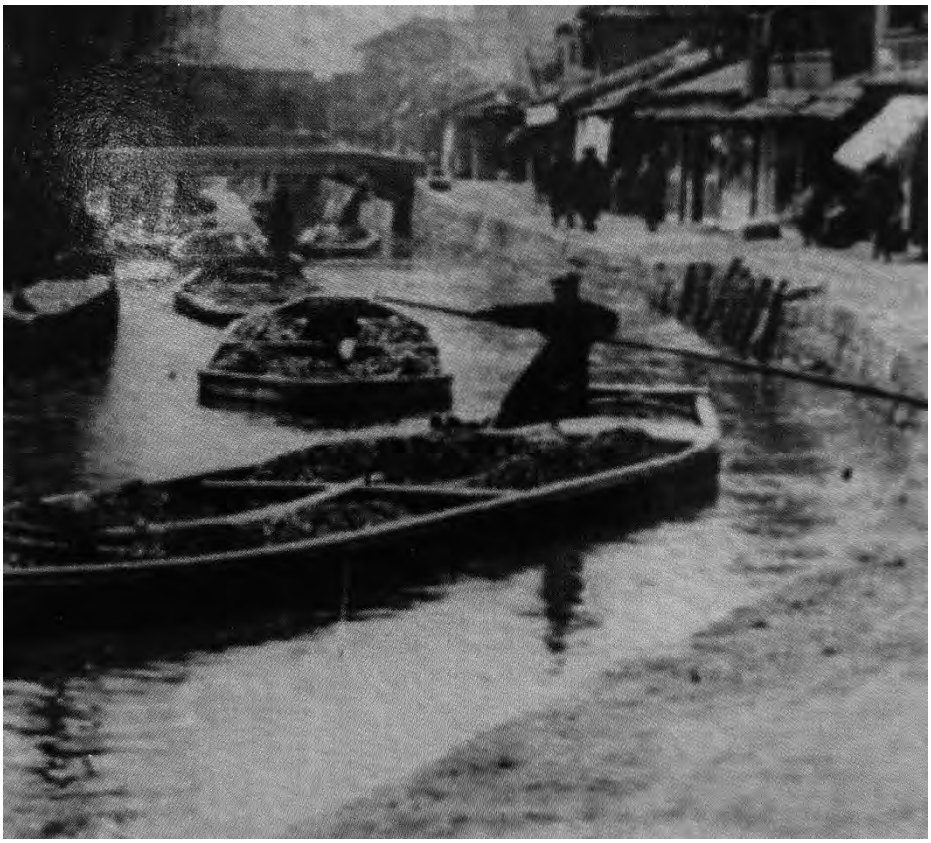
2020 年度　地域連携事業

堀川 400 周年記念プロジェクト

～堀川の真実～



九州共立大学

スポーツ学部（スポーツ学科）

経済学部（地域創造学科）

堀川の真実とは（概要）

遠賀川を本流として江戸時代に開削された堀川は、近代日本の発展に重要な役割を果たした石炭運搬用の河川としての認識が定着しているようです。しかし、この堀川が開削された当初の目的は違うところにありました。堀川は、誕生 400 周年を迎えています。この記念すべき機会にあらためてそのルーツに光をあてることは、先人から受け継いだ貴重な地域資源（歴史遺産）を後世に残していく重要な意義があります。

堀川の歴史は、遠賀川沿いに定住した人々の生業としての農業用水の確保、遠賀川の治水管理にルーツがあります。暴れ川として有名な一級河川の遠賀川を活用した開削工事は、その完成に至るまで難工事の連続であったようです。その背景には、江戸時代の黒田藩の治世が大きく影響していました。当時の福岡の地を領有していた黒田藩は、多大な難題を克服してこの工事を完成させました。莫大な資金や人員を投入した藩をあげての工事の目的、それは遠賀川住民の生活（農業用水、治水管理）のためだけだったのでしょうか。

ここに堀川の真実があります。黒田藩は、幕藩体制下で、徳川将軍家から二大事業を任されていました。長崎警固番役と朝鮮通信使の接待です。共に国家的重要施策であり、莫大な費用の負担を強いられました。つまり福岡藩は危機的な財政問題を抱えていたわけです。藩を挙げての解決策の一つとして、この堀川開削工事がありました。財政を潤すための農業生産の向上とそのための治水管理が喫緊の課題であったわけです。これが完成に至るまで難工事を継続しなければならなかった最大の目的です。この視点は、現在に至る堀川の歴史に記憶として残されるべき歴史的事実なのです。歴史の「原点回帰」を志向することの重要性を問うこと、これが本プロジェクトのテーマなのです。

2021 年 1 月

（プロジェクトメンバー一同）

【目　次】

堀川 400 周年記念プロジェクト（堀川の真実）発刊によせて（P3）
プロジェクトメンバー（P4）

第１部　堀川とは何か
目的と役割　（P5）
遠賀川と洪水（P5）
農業用水路としての堀川（P7）
黒田藩と農業生産高の向上（P7）
堀川開削の年表＜西暦 1620 年～1804 年＞（P8）

第２部　堀川と二大事業
堀川と二大事業
　①長崎警固番役（P9）
　②朝鮮通信使　（P10）
福岡藩と財政問題（P11）
筑前修多羅米蔵　（P11）
年貢米の輸送と堀川（P11）
年貢米の大阪直送体制（P12）

第３部　堀川人物伝（開削に関係した人々）
黒田長政＜くろだ　ながまさ＞　（P13）
栗山大膳＜くりやま　だいぜん＞（P15）
黒田継高＜くろだ　つぐたか＞　（P17）
一田久作＜いちだ　きゅうさく＞（P19）

フィールドワーク
河守神社　（P22）
大膳橋　（P23）
車返しの切り抜き　（P23）
中間の水門＜唐戸＞（P24）
寿命の水門＜唐戸＞（P24）
福岡藩修多羅米蔵跡（P25）

おわりに（P26）

『堀川 400 周年記念プロジェクト（堀川の真実）』発刊によせて

ずいぶん昔のことであるが、あるテレビコマーシャルで“川のあるところに人は棲む”というフレーズを目にしたことがあります。明確に記憶に残っているわけは、「棲む」という言葉にあったと思います。「棲む」とは、生物学的表現です。普通は「住む」と表記するでしょう。そもそも、人は水無くしては生きられません。水は命の生命線であり、人は生物として生きるために、まず水の豊富な川辺に定住しました。定住後、生業（なりわい）としての農耕牧畜が始まり、その後、産業用として利用する必要が生じ、物資の運搬にも活用することにつながります。これらのプロセスを経て文明や文化が生まれてきたのです。堀川 400 周年記念プロジェクト（堀川の真実）のモチーフは、まさに上で述べた川にまつわる一連のプロセスに関係するものです。

福岡県の筑豊炭田は、明治～昭和にかけて日本を代表する石炭産出地であり、大量の石炭を遠賀川（一級河川）と堀川（人工河川）を活用して若松港まで運搬していました。若松港は、これまた当時の日本を支えた物資の巨大積出港でした。堀川は、この近代日本を支えた産業用の人工河川であったのです。堀川を知る人の多くは、石炭運搬用の河川として認識しているようです。しかし、河川発達の歴史や存在意義の視点から考えると、堀川の歴史については遠賀川沿いに定住した人々の生業としての農業用水の確保ということがクローズアップされるべきではないでしょうか。人工河川としての堀川の本流は、暴れ川として知られた遠賀川です。この河川の治水管理の必要性からみた視点も重要でしょう。

堀川 400 年の歴史の源流を探る本プロジェクトの主人公である堀川は、完成に至るまで難工事の連続であったようです。工事は江戸時代に始まりました。当時、福岡の地を領有していた黒田藩は多大な難題を克服して完成させました。莫大な資金や人員を投入した藩をあげての工事の目的、それは遠賀川住民の生活のためだけだったのか、他に目的があったのか、その背景も明らかにする必要があると考えます。歴史の「原点回帰」を志向することが本プロジェクトのテーマなのです。

堀川 400 周年記念プロジェクトは、九州共立大学スポーツ学部生と同大学経済学部地域創造学科に所属する有志の学生が取り組みました。学生は、郷土史家の先生から熱のこもった講義を受け、自ら文献資料等を活用して調査分析し、さらにフィールドワーク（現地視察）を通して堀川の真実を明らかにしました。九州共立大学は、北九州市八幡西区の折尾にあります。本プロジェクトは、折尾のまちづくりや地域活性化への社会貢献としての活動です。この折尾の町を流れ、折尾の歴史にも縁が深い堀川の真実を冊子にまとめ、地域住民による歴史の再発見及び再認識に活用してもらう試みでもあります。

現在、コロナ禍という社会現象の中で、混乱した世相となっています。身近な家族や地域とのつながりが再認識されています。今、人と人の繋がり、地域と地域の繋がりが求められています。折尾の住民の方々をはじめ、折尾の町に興味関心を持たれている方が繋がるツールの一つとして、堀川 400 周年記念プロジェクト（堀川の真実）をお贈りします。この小冊子を家族の方や地域住民の方々でお読みいただき、楽しんでもらいたいと思います。400 周年をきっかけに地元にゆかりのある堀川を語り合い、後世にも伝えていただきたいと願っています。折尾の町の活性化、これがプロジェクトメンバーの共通の願いです。

九州共立大学　スポーツ学部
山田　明

【プロジェクトメンバー】

	氏　　名	所属・学年
1	川　勝　陽　祐	スポーツ学部　スポーツ学科　４年
2	石　井　滉　大	スポーツ学部　スポーツ学科　３年
3	大　庭　海　斉	スポーツ学部　スポーツ学科　３年
4	関　　健　成	スポーツ学部　スポーツ学科　３年
5	岩　松　春　輝	経済学部　　地域創造学科　２年
6	加　来　優里香	経済学部　　地域創造学科　２年
7	實　松　柚　希	経済学部　　地域創造学科　２年
8	嶋　田　萌　乃	経済学部　　地域創造学科　２年
9	末　廣　勇　輝	経済学部　　地域創造学科　２年
10	豊　原　幸　汰	経済学部　　地域創造学科　２年
11	深　浦　愛　梨	経済学部　　地域創造学科　２年
12	益　田　太　陽	経済学部　　地域創造学科　２年
13	松　本　昌　士	経済学部　　地域創造学科　２年
14	山　本　優　馬	経済学部　　地域創造学科　２年
15	和　田　廉　央	経済学部　　地域創造学科　２年

指導者

山田　明　　（九州共立大学スポーツ学部スポーツ学科）

尾上 百合加　　（九州共立大学経済学部地域創造学科）

協力者

三浦　明彦（郷土史研究家、遠賀町在住）

梅﨑龍之介（スポーツ学部　スポーツ学科　４年）

第１部　堀川とは何か

●目的と役割

今から 400 年前、遠賀川から洞海湾まで全長１２㎞にも及ぶ大運河が竣工した。慶長 5 年(1600)に筑前の国主に就封した黒田長政が計画し、実施したものである。工事は一時中断したが、その後 128 年の時を経て工事の再開が成され、苦難の末、完成に至る。完成された運河は「堀川」と命名され、これ以降、洪水の対策、農業用水の確保、年貢米の流通にと幅広く役立ち、明治時代以降は石炭の流通経路として脚光を浴びることになる。すなわち堀川は、地域の災害対策、地域農業の振興、福岡藩の財政の安定化、さらには近代国家の発展に大きく寄与したのである。そして竣工より 400 年目の節目を迎えた今日、改めて堀川の存在に目を向け、その真の姿、堀川の真実を学び直したい。そこで今回、石炭の運搬路としてのみ知られがちな堀川の本来の役割を探ることとする。

●遠賀川と洪水

遠賀川は嘉穂郡馬見山を源流として、福岡県の筑豊地区から北九州市・中間市・遠賀郡を流れる一級河川である。流域面積は約 1030 ㎢あり、九州有数の河川である。遠賀川の流れや地形の大部分は、今から 100 万年前から 1 万年前の氷河時代に始まったといわれている。遠賀川における記録があるのは 400 年前からとされているが、江戸時代初期の遠賀川は、現在よりも曲がりくねり、今のような高く丈夫な堤防はなかった。そのため、雨が降るとすぐに氾濫してしまうため、別名「暴れ川」と呼ばれていた。遠賀川の歴史は、洪水との戦いの歴史といっても過言ではない。遠賀川の洪水について、史実に遺る一番古い洪水は元和 6 年（1620）とされ、その後、明治 22 年（1889）に至る 270 年の間に約 70 回の洪水が発生した。関ヶ原の合戦の論功行賞によって豊前中津 12 万合（18 万石）から筑前一国 52 万石余の大々名に取り立てられ、晴れて国持ち大名（国主）に就任したのが、黒田長政である。前期合戦の勝者であり、天下人への一歩を踏み出した徳川家康は、功労の大きかった長政に対し、豊かな国とされる筑前を与えたと言われている。筑前は豊かな穀倉地帯を有しており、大国といえる存在であった。しかし地域の代表的大河である遠賀川が大雨の度ごとに氾濫していた。この度重なる氾濫によって周辺地域の村々は、田畑や人畜が大きな被害を受けていた。せっかく得た大国を豊かな国として維持するため、洪水対策は急務といえた。そこで長政は、慶長 17 年（1612）に「遠賀川治水大計」を策定し、洪水への対応を始動した。

ただひとつの川だけでも、このように深いストーリーがあるのに驚いた。今では、「掘る」という作業でも、機械で苦労せずに掘れる時代だが、昔は手作業で行っていたと想像するだけで気が遠くなると感じた。しかし、道幅が狭い場所や水が汚いところなどを「埋めてほしい」という声が上がっているらしく、昔の人たちが何十年と苦労し掘った川を、一瞬にして埋めてしまうのは違うのではないだろうか。これを機に、多くの人にこの冊子を手に取って「堀川」の歴史について知ってもらい、「堀川」を後世に伝えていきたい。

嶋田　萌乃・深浦　愛梨

近代化産業遺産：平成19年(2007)11月30日 国より認定
堀川運河 12km の旅物語
洞海湾
折尾駅
堀川
(新々堀川)
川ひらた
(県立折尾高校内)
3
筋石
車返しの
切り貫き
河守神社
金山川
八幡西区
東水巻駅
水巻町
堀川
(新々堀川)
中間駅
中間市役所
中間市
中間の唐戸
堀川
(新堀川)
遠賀川
黒川
八幡西区
堀川
寿命の唐戸
N

【出典：講師提供資料】

●農業用水路としての堀川

治水対策の具体案として浮上したのが運河の起工である。この運河起工の目的は、洪水対策であることはもちろんだが、それにも増して運河の水を最大限利用して農業用水とし、水の届かない地域にも水を行き渡らせるということもあった。河川を控えていても河川が大きいほど、かつ下流に行くほど取水は難しくなる。遠賀川は大雨が続くとすぐに氾濫する一方で、日照りが続くと遠賀川から自由に田畑に水を引くことができず、作物が枯れてしまい大きな被害を与えていた。洪水対策と農業用水の確保のため、現中間市の底井野村の下から岩瀬村・吉田村・折尾村を経て洞海湾に至る新川を掘り、遠賀川の水を二分する計画を策定した。それは、将来洞海湾の干拓後、新田のための用水にもちいることも考えられた。

●黒田藩と農業生産高の向上

洪水対策や農業用水の確保は、農業生産高（米の収穫高）を向上させ、年貢米を増やすという計画に繋がる。さらに増産された年貢米は運河を使って運搬し、最寄りの積み出し港に集積するというものである。この計画が実現できれば、福岡藩・黒田家の財政は潤い、出費増大、多難な財政状況を救えると考えていた。このような理由で、新たな農業振興を図る上で、水を得ることは必要不可欠であった。また振興を終えた田畑も洪水から守れ、さらには運搬用水路として活用するというものであった。とにかく、農業用水確保の切り札としても考えられていた。それ故に一度ならず二度までも工事を起こし、ついには完成させ、その名も堀川運河とした。ちなみに通称は、堀川という。

感想

今回堀川の学習を通して、川一つに長い年月の歴史と地域住民の思いが込められていることに感動した。長い年月をかけて完成させた堀川がなかったら、自然災害が多い日本で遠賀川近辺地域は水害に見舞われていたと思う。実際に堀川沿いを歩いてみて、堀川に由緒ある神社や公園があることを知った。そのことから現在も堀川の歴史は重要視されていることが分かった。

實松　柚希

堀川は何故掘られたのかよくわかった。洪水対策のために掘られたと知って驚いた。船は石炭を運ぶためのものではなく、年貢米を運ぶためのものであったのは知らなかった。現在のように機械で一気に工事が進められないのに、堀川を手作業で掘ったのは想像もつかない。

加来　優里香

＜堀川開削の年表（西暦 1620 年～1804 年）＞

西暦	和暦	内容
1620	元和６年	黒田長政が遠賀川を２度視察
1621	元和７年	第一期工事着工
1623	元和８年	黒田長政の死去により未完成のまま中止
―	―	工事中断期間
1751	寛永４年	第二期工事着工　黒田継高によって再度工事着工
1755	宝暦５年	堀川本工事
1757	宝暦７年	車返し切り抜き　完成
1759	宝暦９年	車返し切り抜き　拡幅工事完了
1762	宝暦 12 年	下流部分が則松川（現、金山川）に接続し洞海湾に通じる
1762	宝暦 12 年	第三期工事（中間唐戸）着工・完成
1763	宝暦 13 年	堀川の通船が開始される
1802	享和２年	上流川の水害が起こったので、新たな取水口追加の計画が始まる
1804	文化１年	第四期工事（寿命唐戸）着工・完成

【出典：黒崎歴史ふれあい館　展示資料を参考に作成】

＜遠賀町域の村々の石高推移表＞

	天正年間 (1573-92)	慶長 10 年 (1605)	元禄５年 (1692)
鬼津	779	2018	2375
尾崎			1204
若松		44	818
別府	645	820	1473
嶋津	550	881	801
小島掛			262
今古賀			668
広渡	252	857	1145
虫生津		388	622
下底井野	865	863	1017
木守			958
	3091	5871	11343

【出典：遠賀川流域史探訪　林正登　葦書房　P. 140】

長政が行った堀川の開削や改修などにより、水害は減少し灌漑（かんがい）用水が行き届いたことから新しく開いた土地が増え、流域の米の収穫は次第に増加した。天正年間と元禄 5 年を比較すると約４倍に増加している。

第２部　堀川と二大事業

●堀川と二大事業

江戸時代、全国三百諸藩の中で第５位に位置付けられる雄藩、それが福岡藩・黒田家である。しかし、福岡藩には、多大な出費を伴う二大使命が課せられていた。それは、長崎警固番役（長崎の海防）と朝鮮通信使の接待役である。まず警固番役というのは、唯一の海外貿易港である長崎の街を警備するもので、この役目を佐賀藩・鍋島家と隔年おきに務めるのである。すなわち長崎より近い位置に封土があり、しかも雄藩であるということから、福岡・佐賀の両藩に江戸幕府から命令が下ったわけである。一方、通信使接待役というのは、江戸幕府の将軍に対して朝鮮国王が派遣した外交使節団を迎え入れ、これを接待するものである。朝鮮国・釜山港を使節の船団が出発すると、船団は対馬や相島を経由して博多港へ入る。この折、使節団が立ち寄る相島と博多は福岡藩の所領地内であることから、江戸幕府から接待役の命令が下っていた。こうして対外的重大使命が下された福岡藩は、他藩よりも経済的負担が大きく絶えず財政難に苦しんでいた。

①長崎警固番役

・長崎警固番役

長崎警固番役は、長崎を警護防衛するという役割のことであり、肥前佐賀藩（鍋島家）と筑前福岡藩（黒田家）という二つの九州の雄藩が一年おきにこれを交互に行った。

・魚見岳台場

長崎県長崎市に、江戸時代の後期に築造された台場の石垣が残っている。この魚見岳台場は、フェートン号事件（イリスが長崎港に強行突入し、敵対していたオランダ人を盾に江戸幕府へ薪水・食料を強要し逃げた事件）が発生してしまったため、長崎の沿岸防衛対策を強化しようと作られた。この台場に駐屯することを幕府から命じられた福岡藩・佐賀藩が長崎警固番役を担った。

※長崎警固番役余滴

主たる費用の内訳
1. 二千人余の藩士の駐屯費・移動費
2. 軍事拠点の築造

【出典：https://www.hb.pei.jp/shiro/hizen/uomidake-daiba/photo_006b.jpg】

②朝鮮通信使

・朝鮮通信使とは

対馬藩主・宗義智が朝鮮との間に己酉条約を結び、釜山に倭館を設置したことから、宗氏に外交特権が認められた。その後、朝鮮から使者が送られてくるようになり、これが通信使と呼ばれるようになった

・相島（あいのしま）・遠見番役について

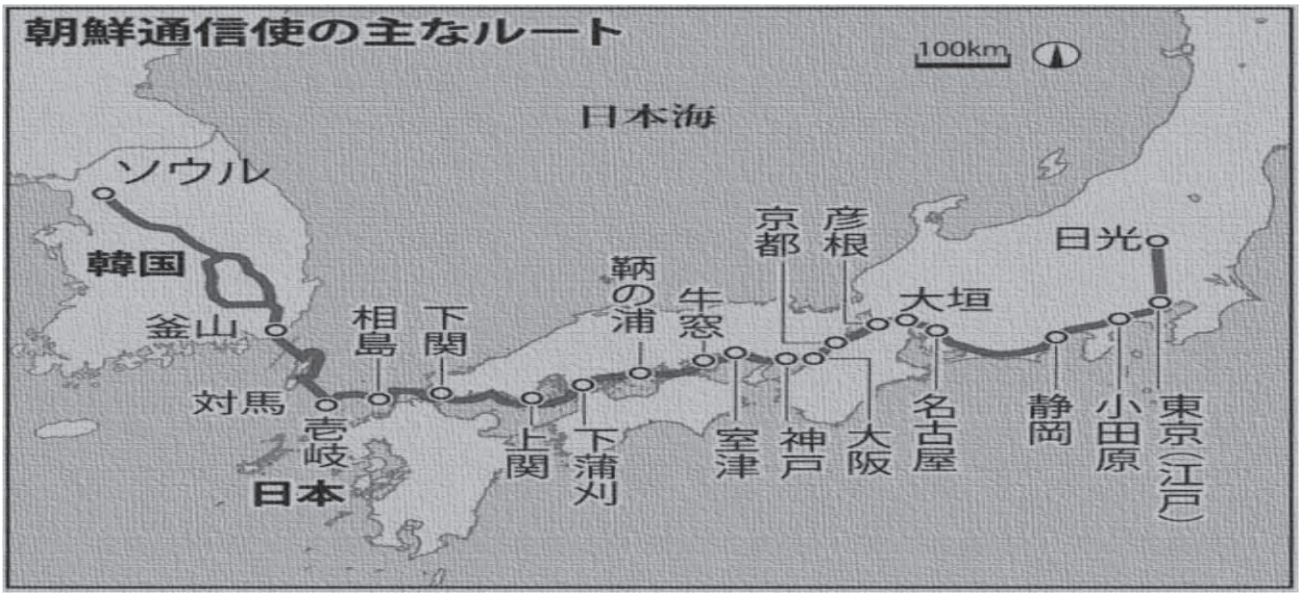
相島の高山（たかやま）（島一番の高所）に遠見番所が設置された。そこに海上の監視役を数人置き、密貿易の監視と朝鮮通信使に伴う対外施策を行った。

※朝鮮通信使余滴

主たる費用の内訳
1. 使節団一行の食費
2. 使節団の宿舎の建築費
3. 宿舎で使用する食器・家具類の購入費
4. 対馬藩主の宿舎となる民家の修理費
5. 施設の船団が停泊する港の建設費
これら諸々の費用の総計は 28 億円相当

【出典：https://livedoor.blogimg.jp/beckykusamakura/imgs/7/0/70523780.jpg】

朝鮮通信使のルート



【出典：https://mainichi.jp/articles/20171031/ddn/041/040/018000c　最終閲覧 2020/12/30】

●福岡藩と財政問題

朝鮮通信使制度は、鎖国時代の数少ない対外交渉の場であり、当時の幕府にとって国の威信をかけた外交行事のひとつであった。そのため、福岡藩が対馬から江戸までの往復の接待にあたることは藩の命運を左右する重要な行事であり、少しの落ち度も許されないものだった。このような重要任務を負うことにより、幕府に対して忠誠を示し幕藩体制内での藩の地位を固めた。朝鮮通信使一行は、楽隊・医者・通訳・画家なども含めて平均 500 人にも及ぶ大集団であり、出発から帰還まで 4～5 ヵ月の日数を要した。そのため、朝鮮通信使に対する接待は、膨大な財政負担や領民の労力を提供しなければならかったため、藩財政を慢性的に圧迫させる大きな要因にもなっていた。堀川開削の動機について「堀川御記録写」（一田家文書）は、水害を減らすために立案したと記録され治水を第一の大義名分としていたが、藩財政の安定化を図るためには、洪水を止め耕作地を拡大し、年貢収入の増大を目指したものだったとされる。堀川の開削は、黒田藩の安定した年貢収入の確保、またそれをいかに中央市場である大坂と結びつけるかという水運としての利用が展開された。

●筑前「修多羅（すたら）米蔵」

現在の北九州市若松区修多羅地域に江戸時代、福岡藩における最大の米の集積地があった。もともとは黒田藩の遠賀、鞍手、嘉摩、穂波の４郡の貢米の集積地として同藩により芦屋(1700 年)に米蔵が設置され、廻船で大阪の蔵屋敷へ米を送った。しかし、芦屋州口が年々浅くなり、船の往来が困難となってきたため米蔵は修多羅村（1717 年　現在若松区修多羅）に移設された。この米蔵に集積された米は、いわゆる年貢米（租税）として徴収されたもので、ここ修多羅より若松港を経て、大坂（大阪）の福岡藩・蔵屋敷に海上輸送されるものである。そして大坂から各地方に流通され、通貨に換えられるのであった。この通貨が藩の財源となる。また、黒田藩での貢米の大阪への積出港は横浜（糸島郡今宿村）と若松の２ヶ所だけであり、貨幣獲得のための貢米のうち半数以上（約 8 万石）が若松に集積されていた。

●年貢米の輸送と堀川

修多羅の米蔵に運ばれる米は、筑前の穀倉地帯から堀川の水運を利用して運送されたものである。堀川の水運利用により、より早く、より確実に運搬できるようになったため画期的に米の集積量が増加した。これにより、この米蔵に集積された米によって福岡藩は大きな収益を上げることに成功する。ちなみに米蔵は、江戸時代だけではなく、明治時代になっても使用され、明治 8 年（1875）まで存在した。その後、米蔵は取り壊されたが、建材の一部が他の倉庫や校舎に転用されたという。現在、米蔵の跡地には何の遺構もないが、跡地を示す石碑と説明版が建てられている。

＜福岡米蔵の石碑＞

●年貢米の大阪直送体制

遠賀川流域の遠賀、鞍手、嘉摩、穂波の年貢米は、若松の積立所へ積み出し、ここからただちに大阪へ送り出すという年貢米の大阪直送体制が確立していた。その後の福岡藩の年貢米販売体制の基本的な枠組みとなっていった。

天下の台所

1615 年の「大阪夏の陣」で荒れ果てた大阪は、その後、幕府の直轄領となって復興が進められた。運河が整備され、諸国の船が絶え間なく行き交う「水の都」として再生した大阪。各藩の蔵屋敷が立ち並び、米や特産物の取引が行われて日本経済を左右する「天下の台所」と呼ばれるようになった。淀川に浮かんだ堂島には米市場が開かれ、ここで行われる取引が全国の米の値段を左右した。

【出典：NHKfor School　https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005403054_00000

最終閲覧 2020/12/31】

感想

今回実際に学外研修に行き、堀川の真実について深く学ぶことができた。長崎警固番役や朝鮮通信使と堀川の関係について授業の講義の際に深く内容を掘り下げて説明してくださったので、講義の内容と関連付けてお話しを聞くことができた。修多羅米蔵では、石碑と説明板のみしか残っていなかったため、残念だったが、江戸時代から若松が港として栄えていたことが説明版と講義で理解することができた。

豊原　幸汰

堀川について学習を通して、堀川に対する考え方が変わった。堀川の主な役割は、石炭を運ぶためのツールでしかないと考えていた。実際、地域の方々が催す「オリオンピック」にも「石炭運びレース」という競技があるため、尚更、石炭運びのための川という印象が強かった。しかし、歴史の流れやその時の状況を深く掘り下げ、学んでいくことで、「堀川の本当の意味」というものを知ることができた。

末廣　勇輝

第３部　堀川人物伝（開削に関係した人々）

黒田長政（くろだ　ながまさ）

●人物紹介

長政は、黒田官兵衛の長男として誕生した。幼名は松寿丸という。長政は、関ケ原の戦いで大きな功績を挙げ、徳川家康より筑前国名島に 52 万 3000 石もの封を受け、福岡藩の初代藩主となるなど数々の功績を挙げているキリシタン大名であったが棄教した。関ケ原の戦いの後筑前の国主になった長政は、最初は名島城を居城としていたが、新たなる拠点として福岡城を築城した。長政は、築城の名手として知られており、福岡城以外にも福岡市の筥崎宮や、住吉神社、江戸城築城の際の天守台などの建築物を各地に残している。

●堀川との関係性

黒田長政は、堀川の開削を決意し、起工を命じた堀川開拓の中心人物である。関ケ原の戦いの軍功により、慶長 5 年（1600 年）、黒田長政は筑前国の太守となった。領国防衛の観点から六つの端城（出城）を築いたり修復したりした。その領国経営の一つとして、農業政策推進があった。長政は領内の田畑を巡検し、治水の必要性を実感したという。中でも領国内の大河、「遠賀川」に着目、川の氾濫、洪水による被害を軽減し、川の流れを変え、合わせて運河を開くことを立案する。長政は運河の開削により、洪水の抑制、農業用水の確保、さらには年貢米の流通経路を作れると計算した。この工事の元締めは栗山大膳であり、福岡城築城の際に使役させた石工を抱え置き、農民の農閑期を狙ってこの工事にあたらせ、元和 7 年（1621 年）1 月より着手した。しかし、吉田村の宮尾と御輪地の間は、硬い岩層の上に土がかぶさった急斜面のために掘っても掘っても地崩れで工事が進まないという難工事になった。また、その場所が貴船神社域内であったために、神の祟りなどという百姓の流言が広がり、工事を著しく妨げた。農閑期とはいえ、強制的な夫役を命ぜられた農民の間に、次第にこの工事への嫌悪感が生まれていたと想像できる。長政入国後の本城・端城の築城のために納期を無視した農民の強制的な夫役が度重なり、他国へ走るものが多かったと伝えられている。そして、長政は病気が悪化し体調を崩しがちになり、56 歳の生涯を閉じた。長政の逝去と黒田騒動の中心人物、栗山大膳の退去によって、堀川開削は中断された。

感想

今回、堀川の歴史について調べていくにつれ、過去の偉人の成し遂げたことの凄さを身にしみて感じた。私の調べた黒田長政さんは、まだ機械や爆薬などが普及していない時代の中で堀川開削を指示した張本人である。このことに対し、私は、あの時代でこの指示を出すという思考に対し、驚きを隠せなかった。そして、この偉業に携わった人たちの中でも、特に直接堀川を掘った方々の忍耐力と精神力は、科学力が発達した現代にはないとても尊いものを感じた。

岩松　春輝

＜黒田長政＞

生誕：永禄 11 年 12 月 3 日／死没：元和 9 年 8 月 4 日

【出典：福岡市博物館蔵ホームページより】

福岡藩　歴代藩主

黒田長政：初代　藩主
黒田忠之：第 2 代藩主
黒田光之：第 3 代藩主
黒田綱政：第 4 代藩主
黒田宣政：第 5 代藩主
黒田継高：第 6 代藩主
黒田治之：第 7 代藩主
黒田治高：第 8 代藩主
黒田斉隆：第 9 代藩主

＜舞鶴公園 福岡城下の橋大手門＞

【出典：福岡県史通史編黒田藩（一）（二）を参考に筆者作成】

＜六端城　城主一覧＞

名称	城主名	城主知行高	所在地
黒崎城	井上之房	17,500 石	御牧郡
若松城	三宅家義	2,750 石	御牧郡
鷹取城	母里友信	14,000 石	鞍手郡
益富城	後藤基次	14,000 石	嘉麻郡
麻氏良城	栗山利安	15,000 石	上座郡
松尾城	中間統種	2,500 石	上座郡

【出典：福岡県史通史編福岡藩（一）P. 194】

栗山大膳（くりやま　だいぜん）

●人物紹介

堀川の第一期工事の総責任者として堀川の礎を築いたのが栗山大膳である。天正 19 年（1591 年）、黒田氏の家臣・栗山利安の子として豊前国の平田城で誕生。筆頭家老として黒田長政に仕え、長政からも厚く信頼されている。しかし長政の死後、福岡藩 2 代藩主・黒田忠之は勝手な振舞いが目立ち、大膳にも聞く耳を持たず対立を深めた。江戸幕府に「忠之に陰謀の企てあり」と訴えた。幕府による裁決の結果、「利章は乱心した」ということで利章を南部藩（陸奥国盛岡藩）預かりとし、黒田氏は改易を免れた。この一連のお家騒動は黒田騒動（栗山大膳事件）と呼ばれた。

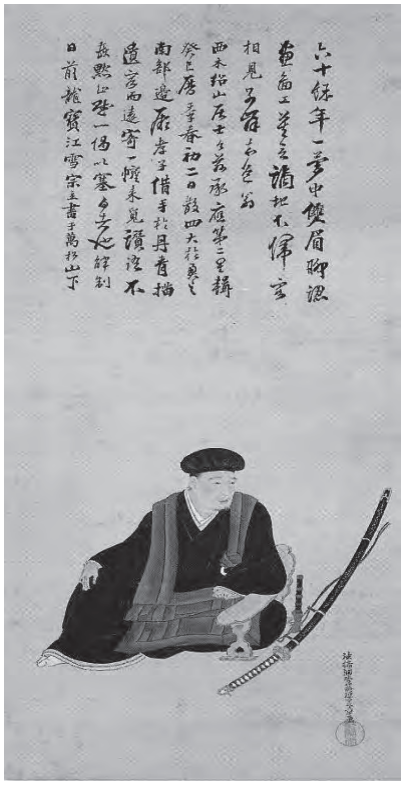
●栗山大膳と堀川の関係

堀川は遠賀川流域の洪水調整や灌漑（かんがい）、水運を目的に、遠賀川と洞海湾をつなぐために元和 7 年（1621 年）に黒田長政が、中間市から吉田を抜け八幡西区折尾までのルートを当時の家老、栗山大膳に第一期工事の総責任者として任命し、工事が始まった。堀川の開削工事は石工や農民の夫役により、農繁期の 5・9・10 月と寒季の 11・12 月を除いた、正月から 4 月までと、6 月から 8 月までの期間に行われた。しかし、吉田と折尾の間は地形が悪く、水が湧き出て大変な工事となった。また、硬い“折尾石”が工事をはばみ、硬い岩層の上に土がかぶさった傾斜面のため、掘っても掘っても地崩れで工事が進まない難工事となった。堀川工事は、元和 9（1923）年に長政の逝去したのを機に、中間村から岩瀬村の間が約 2 キロ、吉田村の東北の山間より折尾村の領域まで約 500 メートルを掘ったまま放置され、完全に中断する。吉田村の工事跡は堀池となって残り、栗山大膳の名前にちなんで「大膳堀」と呼ばれた。その後、128 年後の宝暦元年（1751 年）福岡藩 6 代藩主黒田継高のとき工事を再開した

感想

今回の実習では折尾地区や堀川について深く学ぶことができた。私は大学進学で熊本県から折尾に来たためほとんどこの地域のことを知らなかったが、堀川の魅力、歴史について深く触れることができた。歴史あるものでも現代に必要がなくなればいらなくなり、撤去されたり埋められたりしていく中で、その歴史的なものについて学び、後世に語り継いで決して無くさないようにしようというとする動きがどれほど大事なことなのか身にしみて感じた。フィールドワークでは実際に堀川の川沿いを歩き、大膳堀橋を見て触った。何も知らなければただの川だが、堀川の歴史について学んだあとに見てみると、どれだけ歴史が詰まっているものなのかがよくわかった。何に対してもまずは学ぶことが大切なのだと思った。

益田　太陽



＜栗山大膳像（福岡市博物館蔵）＞

生誕：天正 19 年 1 月 22 日（1591 年 2 月 15 日）
死没：承応元年 3 月 2 日（1652 年 4 月 10 日）

【写真提供：三浦明彦氏】

＜大膳堀橋（八幡西区大膳）＞

栗山大膳を偲(しの)ばせる橋の名称。
当時、工事が難航し堀川の基礎工事を担当した栗山大膳にちなんで大膳堀橋と名付けられた。

【写真提供：三浦明彦氏】

＜大膳公民館（八幡西区大膳）＞

栗山大膳の名を残す施設。
堀川と言えば、栗山大膳ということが伝わってくる。

黒田継高（くろだ　つぐたか）

●人物紹介

筑前福岡藩 47 万 3 千石余の 6 代目藩主。筑前直方藩 5 万石の藩主・黒田長清の長男として誕生する。幼名は菊千代で、のちに「長好」と名乗っている。1714 年には、継高の従兄で福岡藩第 5 代藩主・黒田宣政の養嗣子となった。宣政の姪であり養女となった幸姫を妻に迎える。宣政が隠居勇退すると家督を継承して藩主となる。以後、51 年に渡り藩主として、江戸時代中期の福岡藩政を担当した。継高が藩主となった翌年、実父・長清の死に伴い、宙に浮いた直方藩領 5 万石を収公して自身の所領地に加えた。藩主となった当時、飢餓の影響で藩の経済力は著しく弱体化していた。そこで継高は藩の経済力を立て直すため、藩政改革を実施する。

●堀川工事の再開

長政と大膳で中断された工事が再開されたのは、1751 年、六代藩主・黒田継高のときであった。第一期工事が中止となってから 280 年後のことである。享保期（1716～36 年）は天候不良が続き、福岡藩ではほとんど毎年のように自然災害が起こった。なかでも享保 17 年（1973 年）の飢饉は、伊勢・近江以西の西日本一帯に発生した大飢饉で、福岡藩では江戸時代を通じて最大の被害を出した。困窮した藩財政を立て直すためにも農政の根本的な基盤整備が望まれ、中止されていた堀川の工事が 280 年の時を経て再開された。

●工事の実施計画

工事再開にあたり、元直方藩士・櫛橋又之進（くすはしまたのしん）が総司（最高責任者）として工事を指揮することになった。堀川御記録写によると、元和の工事の挫折を反省し、①あえて宮の森を避けたように、村民の意向をよく微する。②農民の夫役を取り止め、人夫には日銭を支払う。③工事は急がず、長い年月をかけても完成させる。といった工事の方針が立てられた。前回神社の祟りと百姓を騒いだ宮の森の大膳堀を避けて、一つ谷を越えた吉田村の車返しの岩を切り抜くルートに変更されることとなった。

●堀川開削の最大の難所「車返し（くるまかえし）の切り（きり）貫（ぬ）き（き）」

再開された堀川の工事の一番の難所は、吉田村の車返しの岩山を切り抜く工事だった。車返し付近は岩盤が多く、工事は困難を極めた。土木技術の発達していないこの時代において、ノミとツチだけを使い岩を砕いていた。この岩山を切り抜く工事には郷夫と呼ばれる石工が活躍した。工事中はノミとツチがすぐに使えるよう車返に鍛冶屋が設けられたとされる。約 450 メートルの岩盤を砕くのに 9 年の歳月が費やされた。この時の工事の苦労をしのばせるノミの跡は、今でも吉田の河守神社近くの岩壁に見ることができる。難工事だったこの切貫きは 1757 年に貫通したが横幅が狭かったため、これを広げるための工事が行われ、この工事も 1759 年には完成することとなった。さらに則松川（現在の金山川）へとつなぐ工事が進められ、1762 年、ついに堀川運河は洞海湾まで開通した。

＜黒田継高＞

【出典:https://www.touken-world.jp/tips/7146/　最終閲覧 2020/12/30】

享保の大飢饉

享保期（1716～36 年）は天候不良が続き、福岡藩ではほとんど毎年のように自然災害が起こっていたが、なかでも享保 17 年（1973 年）は、気候不順による作物の生育不良に加え、ウンカと呼ばれる害虫が大量発生し西日本は大凶作となった。福岡藩でも平年 45 万石あった石高が、この年の収穫はたったの 7 万石ほどしかなかった。

「享保の飢饉」の被害者は、幕府が掌握しているだけで餓死者 1 万 2 千人余り。死亡した牛馬も 1 万 4 千頭を超え、200 万近い人が飢えに苦しんだといわれている。もっとも筑前福岡藩領だけで人口の 2 割にあたる 6～7 万人が餓死したという推計もあり、実際の餓死者の数はこれをはるかに上回っていたと思われる。

出典

【「国立公文書館」http://www.archives.go.jp/exhibition/digital/tenkataihen/famine/index.html

最終閲覧 2020/12/30】

感想

黒田長政と栗山大膳で止まっていた堀川工事を完成された黒田継高について調査を行っていく中で、普段ただ横を通るだけの堀川に長い時間をかけて今の姿になっていることを知ることができました。多くの人がこの工事に関わり、その気の遠くなるような作業の結果が実を結び、今に至っていることを調査し、実際に見て感じました。

和田　廉央

一田久作（いちだ　きゅうさく）

●人物紹介

一田久作（もともとは小田久作）は 1722（享保 12）年に生まれ、現在の中間市である上底井野村に住んでいる農民であった。もともと農民ではあったが、土木工事についての知識や技術を多く持っていた。そのことにより備前国（現在の岡山県）の吉井川の頑丈な水門を造るにあたり、水門調査を命じられることとなった。

●一田久作と堀川

第 1 期工事が中止されてから 128 年後の 1751（宝暦元）年、6 代藩主の黒田継高の時に第 2 期工事が開始された。ここで福岡藩は一田久作に備前の吉井川の水質調査の特命を与えることとなった。この水質調査は命を懸けた仕事である。なぜなら、吉井川は岡山藩・池田家の領内であり、水門の構造は岡山藩の機密事項だったからである。そこで一田久作は巡礼者に変装し、風景画を描いているように見せかけ、水門を細かく記録し、一連の調査を終え帰国することとなった。貴重な水門の構造を模写したものを福岡に持ち帰ることに成功したのである。水質調査後、福岡藩は一田久作の苦労を報いるために、現在の水巻町である吉田村の土地をあたえた。この時に土地持ちとなったことにより、姓を“一田”に名を改めた。その後、一田久作は堀川開削工事が再開された際に監督役に選ばれ、吉田・車返しの岩盤切貫工事と中間の水門（唐戸）開通で陣頭指揮をとり、多大な功績を収めた。堀川第 2 期工事完成後に一田久作は最大の功労者であるとたたえられ、福岡藩は一田久作に対して川庄屋（堀川受持庄屋）に任命した。さらに資格を永代とし、堀川を航行する川船を取り締まり、河守神社の対岸で通船料を徴収し、堀川の修理代などにあてた。一田久作は庄屋としての務めを 10 年間果たすことになった。そして堀川が完成した 10 年後、1772（安永元）年 9 月に 45 歳で永眠した。その後、堀川開削工事の経過と開削工事に最も大きな功績を残した一田久作の功績が記録された疎水碑が 1897（明治 30）年 11 月に建立された。碑文は黒田長成侯爵の筆により、北鷹見町に現存している。

感想

折尾には堀川という川があるということはもともと知っていたが、堀川の歴史やどのような人物が関わっていたかは知らなかったので、今回の座学やフィールドワークで深く学ぶことができた。さらに堀川がなぜつくられたのか、堀川の役割は何なのかもあわせて知ることができた。

山本　優馬

堀川開削工事の指示をする一田久作川守神社近くの陶板に描かれている

【出典：「広報みずまき 11 月号」2004 年】

一田久作が指揮した吉田・車返しの岩盤切貫工事の跡は今でも残されている

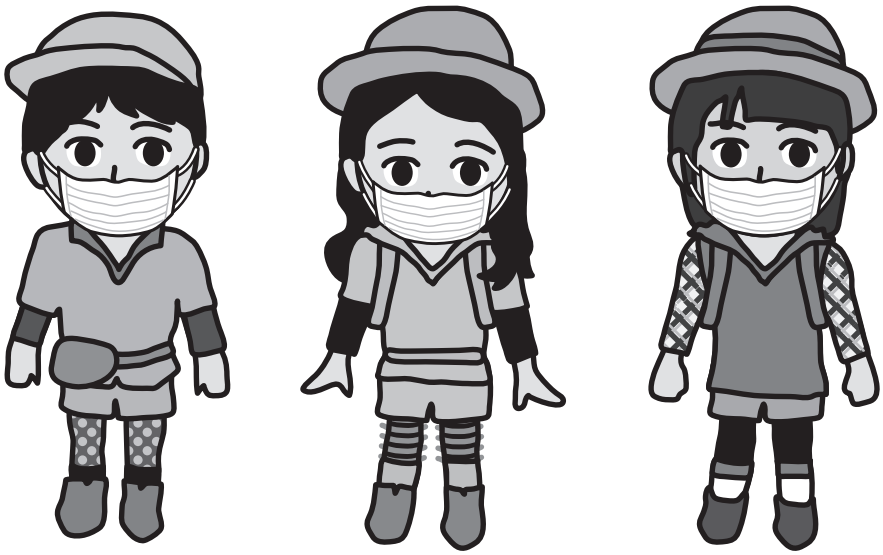
＜一田久作が陣頭指揮をとり開通させた中間唐戸＞

＜一田久作の功績が記録された疎水碑＞

【写真：『遠賀川（堀川）疎水碑』北九州市ホームページ】

フィールドワーク

Field -Work



令和 2 年 11 月 21 日

●河守神社　※掲載写真：著者撮影

宝暦 10 年（1760）8 月、吉田村の車返しの切貫工事が終了した段階で創建された。創建の理由は、堀川の全体工事が無事完成することを祈願するためである。切貫工事の際の廃石を置いていた台地に社殿が建設され、神号を「河守大名神」とした。中間、岩瀬、二（ふた）、吉田、伊左座、立屋敷、下二（しもふた）、頃末、朶（えぶり）、古賀、猪熊、折尾、本城、御開（おひらき）、陣原、則松の堀川周辺 16 ヶ村の守護神とされた。大正９年（1920）以降は、福岡藩６代藩主・黒田継高を祭神するようになった。黒田継高は一度諦めた堀川の工事をもう一度始めようと呼びかけた人物である。私はフィールドワークで、実際に河守神社に赴いた。堀川が盛んに使われていた頃、今では道路になっているところまで川の丈があり、船を止めてすぐに神社にお参りに行けたという。とても高さのある川だったということが分かった。今ではわずかしか川の丈しか残っていない。それでも神社の周囲は、自然に溢れ神秘的な風景はとても美しく感じられた。河守神社には、米の運搬、人の移動、少し時代が進めば石炭を運ぶといった、様々な用途で使われていた当時のひらた舟の写真が飾られている。写真（下図）を見て、この船が渡る堀川の周辺の地域は活気に溢れていただろうと感じ、ひらた舟にとても憧れを受けた。ぜひ一度神社に赴きこの写真を見て当時の活気を肌で感じてほしい。堀川を見てまわり、今見ている堀川の風景をより美しくして地域の遺産として大切に守っていきたいと考えた。この川を散歩で通る人、車で通りすがった人、各々が見たときに心落ち着く場所になると感じたからである。観光地として利用することも可能だろう。

＜河守神社の本殿＞

堀川は地域の一つの象徴である。その環境を整えれば地域活性化になるし、堀川を誇ることができる。何より、祖先が命懸けでなかなか削れない岩を少しずつくり貫き作った功績である。それを失くしてしまわないためにもどうにか川をより良いものにして残していきたい。

感想

今回のフィールドワークで、河守神社付近の堀川では、ごみを捨てる人がいることが分かった。それにより川の流れが悪くなり、藻が繁殖し魚が住めなくなるという環境にある。堀川に対する意識を変え、今こそ地域一体となって川を綺麗にしていく活動を起こせば、それが地域の方の誇りになる。そうなれば堀川も再び地域に活気をもたらしてくれること間違いない。（大庭海斉）

●大膳堀橋

1620 年、主君・黒田長政から筑前北部の治水・利水のため、堀川の閉削を命じられたのが、栗山大膳である。工事は順調に進んだが、1623 年 8 月、黒田長政の死去により中断となった。さらに大膳も黒田家の騒動によって陸奥盛岡に派慰留となり、開削工事は完全に消滅した。しかし地域住民の心には、大膳の行績は心に残り、堀川には「大膳」の名を冠した橋があり、地元の恩人として崇拝されている。

●車返しの切り通し

1751 年 5 月、堀川の開削工事が再開される。この工事再開に伴い、準備の第一段として、前回工事を行った場所、通称「大膳堀」の堀跡の試堀が計画される。大膳堀とは、前回の工事（第 1 回工事）で栗山大膳が開削した堀跡であるが、その場所の地質を調べたのである。こうして本格的に第 2 回の工事が始まり、又之進は、現地調査、測量を経て、車返しの開削を始めた。そして中断となっていた堀川の工事が 128 年ぶりに再開されたことになる。そして車返しの岩盤に立ち向かうことになる。車返しの地質は強固な岩盤であり、難工事となったが、試堀を通して工事可能と判断した。1757 年 9 月、難工事の末に車返しの岩盤を切り開くことに成功する。こうして遠賀川、堀川・則松側をつなぎ、総延長 12K に及ぶ大運河が洞海湾へ至ることになった。このように堀川は完成したのであるが、この完成の裏には車返しの岩盤開削が大きな比重を占めている。この岩盤開削の成功なくして、堀川の感性はあり得なかった。これは決して過言ではない。

感想

今回のフィールドワークに参加して、この長い時を経て作られた大きな川、これは栗山大膳が長きに渡り築き上げた想いだと感じた。決して簡単なことではない困難を極めた作業だったことを写真からも強く考えさせられた。こうしてできた大膳堀橋、車返しの切り抜きの跡をこれからも残していくべきだと感じた。（石井滉大）

＜大膳堀橋＞

＜堀川：車返しの切通し＞

【写真は著者撮影】

●中間の水門（唐戸）

第二次の堀川の工事が終了、水路が完成したことにより、遠賀川から堀川へ導水が実施されることになり取水口として中間村の中島が選ばれて通水が開始された。しかし洪水の際の水圧に耐えられず、二度に渡って決壊する。そんな折、備前の吉井川に頑丈な水門があるという情報を福岡藩が得る。福岡藩は、堀川工事の役夫頭を務めていた「一田久作」を備前に派遣した。久作は吉井川の水門を検分した上で、堀川にも適用できると判断し、建白書を福岡藩に提出する。福岡藩は久作の意見を採用し、宝暦12年4月に中間の中島に水門を建設した。世に言うところの中間唐戸である。中間唐戸は、惣社山の岩盤を切り開いて設けられた。そのため、この唐戸の川側の壁は、両側とも強固な岩盤となっている。この岩盤の間に堰板を通し、板の開閉による水量調整ができるようにした。堰戸は二ヶ所あり、一つ目の堰戸が水圧によって壊れた場合、もう一つの堰戸で対応できる二重構造となっていた。この中間の唐戸は、史跡としての価値が高いということから昭和58年3月19日に福岡県の文化財に指定された。

●寿命の水門（唐戸）

遠賀川から堀川の取木口として宝暦12年、中間に水門の役割を持つ中間唐戸が建設された。ただその後、取水の関係で、遠賀川上流の村々で田畑が湿地化する現象が起こった。そこで取水の分散化が検討され、今一つの取水口、すなわち上流にも水門が作られることになる。いわゆる堀川の第三次工事ということになる。文化元年6月、楠橋村寿命に新たな水門が建設された。水門は、川の両岸に石の樋をたて、天井石と呼ばれる石を渡し、その上部に上屋を設けたものである。構造的には中間の唐戸と同じである。水門を設け、新たな取水口を得たことにより、遠賀川から堀川、さらには真名子川（現・笹尾川）を経由して、中間の水門に直結するという、さらなる大規模運河に発展した。この唐戸、文化財にこそ指定されていないが、北九州市内で唯一現存している江戸時代の治水施設である。

感想

今回、堀川 400 周年プロジェクトを通して堀川の成り立ちや厳しい現状を目の当たりにした。地域活性化の観点から、固有の資源である河川を活かしてまちづくりを展開したいというニーズは、今後ますます高まると思う。このように堀川のいまだ知られていない歴史や魅力を伝え、市民にうるおいややすらぎを与えられるよう、堀川を活かしたまちづくりを地域全体で模索し続ける必要があると思う。（関健成）

【写真は著者撮影】

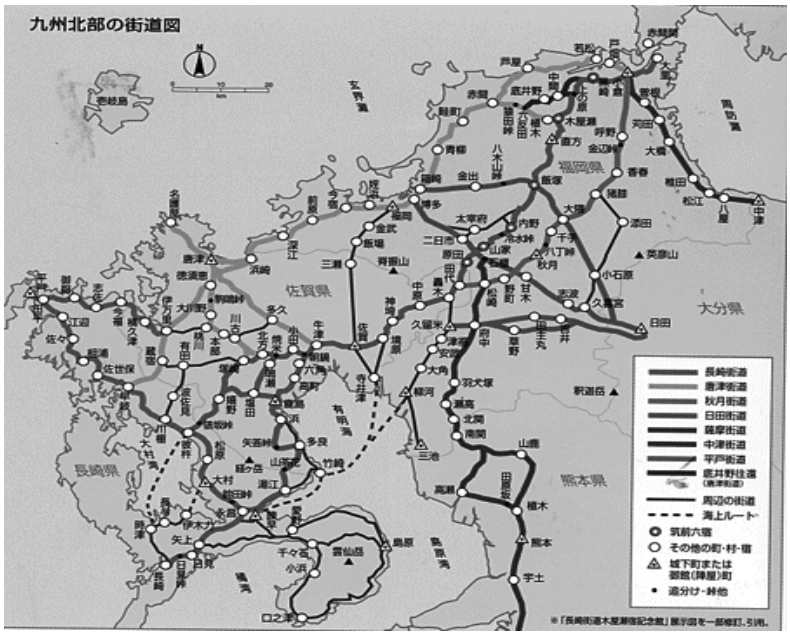
●福岡藩「修多羅米蔵跡」

現在は記念碑が残っているのみである。場所は現在の若松である。米蔵とは米を蓄えるために建てられた施設であり、修多羅にある米蔵は大阪の蔵屋敷に運ばれて換金された。福岡藩の財政を賄っていた重要な施設であったのだ。修多羅米蔵は、福岡藩が遠賀、鞍手、嘉摩、穂波四郡の年貢米を一時集積したがあった場所である。享保２年（1717）芦屋からここに移されたということだ。このとき蔵奉行の肥塚次郎衛門が、白山神社（現在、若松区白山３丁目）に奉納したという絵馬は市の文化財に登録されている。毎年、年貢米の収納期には福岡から蔵奉行が下役数人を引き連れて蔵入りを行い、年貢米を大阪の蔵屋敷に運送した。万延元年（1860）には米蔵が狭くなったので、同年８月に長さ 30 間、横 6 間の新蔵を増設した。米蔵の収容量は約 50 キログラムにして、24 万俵だったという。

感想

フィールドワーク通して、若松が歴史的に重要な役割を担っていたということを発見し、研究テーマとしている堀川の真実に関しても修多羅米蔵が堀川と重要な関係があることも知ることができた。現在では石碑しか残っていないが、この歴史は後世にぜひ残しておきたいと感じた。（川勝陽祐）

＜九州北部の街道図＞



【写真は著者撮影】

おわりに

普段の遠賀川は静かに流れ、河川敷では、野球、サッカー、ラグビー、サイクリング、花火大会など様々なイベントが行われており、憩いの場として私たちの日常生活にすっかり溶け込んでいました。

しかし、このような普段の穏やかな顔とは一転、2018 年 7 月に、記録的な豪雨が襲い遠賀川は氾濫危険水位を超え、堤防が耐えられる最高の水位にまで達しました。多くの人が眠れない夜を過ごしましたが、先人たちが 400 年もの前から治水事業を重ねてきたお陰で堤防の決壊は辛うじて免れました。

今回はこの遠賀川の分流である堀川を通じて、この地域が歴史的にどのような変遷をたどってきたのか、およその流れを把握することができました。また、まちづくりの視点から地域にとって何が必要なのかを深く実感する貴重な機会にもなりました。

それにしても、180 年もの長い年月をかけて完成した堀川でしたが、鉄道が開通し近代化の歩みとともに運河としての役目を終えたことに、いささか寂しい思いも覚えました。見ての通り、現在の堀川は雨水が流れるだけのどぶ川となってしまい、もはや昔の面影はありません。堀川がこの地の発展に大きく貢献したことを知る人はどれだけいるでしょうか、と思えてなりません。

他方では、近頃、歴史的資源を活用したまちづくりが注目されています。私たちは、先人から受け継いだ貴重な遺産をどのような形で子孫に残していくのかが問われています。堀川開削 400 周年という節目の年に、多くの人に堀川のことをもっと知っていただき地域への愛着を育むきっかけになれば幸いです。

最後になりますが、本冊子の編集に当たって、郷土史家の三浦明彦先生にご講義と現地フィールドワークの実施、および貴重な資料を賜りました。心より感謝と御礼を申し上げます。

九州共立大学　経済学部　地域創造学科
尾上　百合加

【出　典】

「堀川 400 周年記念プロジェクト～堀川の真実～」の作成につきましては、以下の書籍や冊子を引用・参考文献として使用させていただきました。

『福岡県史通史編福岡藩（一)』西日本文化協会 編纂 1998 年 3 月
『福岡県史通史編福岡藩（二)』西日本文化協会 編纂 1998 年 3 月
『遠賀川流域史探訪』林正登　葦書房 1989 年 12 月
『遠賀堀川の歴史～宝川と呼ばれた川～』遠賀川下流域河川環境教育研究会 2008 年 3 月
『黒崎歴史ふれあい館』令和２年度前期企画展　資料冊子
『広報みずまき』2004 年 11 月号 NO.829
『市報のおがた』平成 30 年 8 月 1 日号
『わたしたちの遠賀川』遠賀川下流域河川環境教育研究会 2013 年 3 月

令和２年度

堀川400周年記念プロジェクト

発行　令和3年2月

山田研究室・尾上研究室
〒807-8585 北九州市八幡西区自由ケ丘1−8
TEL：093−693−3403

九州共立大学
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY